

現代エスノグラフィーの理論と実践(2)

―フィールドにおける親密性と恋愛―

荒井悠介(一橋大学・日本学術振興会 DC)

1. 目的

本報告の目的は、フィールドワークにおいて調査者と被調査者の間の親密性や恋愛が、調査及び結果にどのような形で影響を及ぼし、問題を持つのかという問いに対して考察を行うことである。

フィールドにおける関係者の親密性の問題に関しては、海外において議論された例はあるものの、それらは周縁的に扱われてきており、国内においても一部の例を除きほぼ議論されて来なかった。

しかし、表出しにくい、フィールドにおいて、セクシャリティや立場に関わらず、親密性と恋愛に関わる問題は存在している。そのため、調査倫理の担保、研究遂行上のリスクの低減、そして調査結果の妥当性の検討を行うためにも、その問題点をより詳細に明らかにすることは必要であると考えられる。

そのため、本報告では上記の問いへの一考察を試みる。

2. 方法

調査者と非調査者の間の親密性、恋愛に関する先行研究を概観し、その問題性に関わる議論を整理する。その上で、実際に問題に遭遇した調査者からのインタビューと事例の分析をもとに、考察を行う。

3. 結果

以上に述べた調査、考察の結果、フィールドにて、恋愛や性愛の当事者となる潜在的可能性を内包した状態における親密性は、以下の段階に分類出来る。親密性が低く警戒心、心理的抵抗が生まれ、調査者と被調査者との接触の面で問題を持つ可能性がある第一の段階。親密性が適度にあるため、情報の真偽、調査者との関係性が不安定になるという問題を持つ可能性がある第二の段階。そして第三の段階は、親密性が高まり、潜在的に内包されていた恋愛、性愛の感情が、一方、若しくは双方の意識上に顕在化しやすくなる。これにより、恋愛、性愛の成就という報酬をもとに、権力関係が生まれうるという問題をもちやすくなる段階である。このように親密性が高まることによる問題を考察することで下記の結論を導いた。

4. 結論

恋愛、性愛の当事者となる潜在的可能性を内包したフィールドワークは、恋愛、性愛の成就という報酬とそれへの期待が発生することが原因となり、権力関係が生まれる可能性を持つ。そこでは、報酬の提供による権力の行使と同時に、その報酬を求めめるために、他の権力を行使される可能性も存在する。これは、セクシャリティ、調査者、被調査者という立場に関わらず、それら権力を行使する側にもされる側にもなりうる。

このような状態は搾取に結びつき得るという問題点に加え、合意が形成されているように見える場合でも、恋愛、性愛の感情が介在することで、関係性が変容し、偏りをもった結果が生まれるという可能性を持つ。

このように、否定的な経験であることのみが要因ではなく、研究結果に偏りをもつ可能性が高いという理由。そして恋愛、性愛の成就にともなう様々な報酬をめぐる調査者と被調査者との間の互惠関係により、リスクが隠蔽されるという問題を持つと考えられる。